

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 申惠媛

論文題目 エスニック空間としての大久保地域-「新大久保」の成立と展開 ——移動性を前提とする社会と共生の事例分析——

本論文は東京都新宿区大久保地域にひろがるエスニックタウン、いわゆる「新大久保」の形成と展開を、8年以上にわたる参与観察とインタビュー調査の成果に、先行研究や雑誌記事などの二次資料を組み合わせて明らかにすることで、現代における地域社会や複数のエスニシティの「共生」の新たなあり方を分析的に解明し、そこで展開される関係性の新たな可能性について考察したものである。

論文全体は3部8章からなり、具体的な内容は以下の通りである。

第1部では本論文の基本的な視座と問題設定が示される。まず第1章では、2000年代以降「新大久保」がエスニックな観光地として有名となっていく経緯と現在までの状況を簡潔に描いた上で、先行研究を(1)大久保地域における移民／エスニック・コミュニティの形成・発展を取り上げたもの、(2)異なるエスニック集団（主に「日本人／外国人」）間関係に注目し、大久保地域を「多文化共生」の現場として見たもの、(3)当該地域の観光地的側面に注目したものの3分野に整理する。その上で、各分野の動向を簡単に紹介しながら、本研究の問いの所在を明らかにし、具体的な研究課題として、[1]エスニックな観光地「新大久保」の形成過程と特徴の分析、[2]観光地「新大久保」と居住・生活空間としての大久保地域それぞれの関係およびその間の相互影響の分析、そして[3]理論的・実証的研究を通じた「地域社会」の新たなとらえ方の提示と[4]移民・エスニシティ研究と都市・地域社会学の（再）接続をあげている。

第2章では第1章での研究史の整理と課題の提示にそって、大久保地域や「新大久保」に関する主要な先行研究を個別的にとりあげて、それらの成果と問題点をより詳しく検討している。特に現代社会の「モバイル」化という一般的文脈の下で、①移民／エスニック・コミュニティとしての当該地域の特徴がどのようにとらえられてきたか、②外国人集住地域における「（多文化）共生」がどのように語られてきたか、という二点に注目して、従来の研究の重要な成果と到達点を確認しながら、そこで使われてきた分析枠組みや視点が直面している課題を具体的に明らかにしている。

第1章と第2章の再検討をふまえて、第3章では先行研究の限界をこえる試みとして、「地域社会」概念が理論的に再検討され再定義される。従来の研究のうち移動性に着目し

たものを特に参考にして、「地域性」と「共同性」をいったん切り離し、空間性と社会性というより操作的な概念の上で再構成することで、「エスニック空間」という新たな視座を提案し、本論文の事例分析で用いる分析枠組みとして定式化している。

第2部では第3章で提示された独自の分析枠組みを用いて、大久保地域—「新大久保」の経験的な事例分析が展開される。まず第4章では日本の外国人関連政策の変遷、都市部における少数派エスニシティの集中、都市空間の記号化と消費のあり方など、当該地域が置かれてきた社会的環境が同地域の地理的特性、人口構成上の特徴、1980年代前半までの歴史的経緯とともに概観される。

第5章～第7章では、2000年代の観光地「新大久保」出現の前後から現在までの社会関係の形成と変容が明らかにされている。①ニューカマー外国人が急増し、特定の移民／エスニック・コミュニティが形成され、居住・生活者どうしの「多文化共生」が地域の課題として顕在化した1980年代後半～1990年代が第5章、②観光地「新大久保」が出現し、そのピークを迎えた2000年代～2010年代初頭が第6章、③東日本大震災やブームの沈滞、ヘイトスピーチ等の影響によって観光地「新大久保」が一度衰退したのち、再び客足を取り戻していった2010年代以降が第7章であつかわれる。分厚いインタビュー調査と参与観察の結果や雑誌記事などのデータにもとづいて、[1]エスニックな観光地「新大久保」がどのように形成され、どのような特徴をもつことになり、そのなかで、[2]観光地「新大久保」と居住・生活空間としての大久保地域がどう結びつけられて、お互いにどのように影響を及ぼしていったのかが明らかにされる。

第3部の第8章は本論文の結論部にあたる。第1部の理論的考察、第2部の事例分析の成果をあらためて整理し、エスニックな観光地「新大久保」の出現によって、当該地域の地域社会がどのように変容していったかを簡潔にまとめている。その上で、移動性を前提とする社会のとらえ方と日本の移民・エスニシティ研究という二つの論点を軸にして、本論文の理論的・実証的意義を反省的にとらえ直して、本論文の主要な成果が、大久保地域—「新大久保」という一事例をこえて、[3]（地域外に居住する人々や短時間の滞在者もふくめた）多様な当事者間の「多重レイヤー空間」という新たな地域社会の姿を描き出すことで、[4]移民・エスニシティ研究と都市・地域社会学を（再）接続するものであることを示し、残された問題点と今後の展望について述べている。

本論文は、著者が長年調査研究してきた東京都新宿区の大久保地域、通称「新大久保」を事例として、(A)従来は日常的な語感に大きく依存しながら強く関連づけられてきた「地域性」と「共同性」をいったん切り離し、(B)複数の身体が何らかの形で共在するという空間性と特定の課題が発見され共有され解決されていくという社会性が、環境条件や関わる当事者たちの変化とともに、たえず新たに結びつけ直されていく動的なプロセスとして地域社会をとらえ直すことによって、(C)そこでの「共生」や「共同」のあり方とその変遷をより明確な視座の下に位置づけたものである。

F・テンニースの『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』以来、地域共同体は最も原初的で基幹的な社会形態だと考えられてきた。特定の空間に根差すこと、すなわち複数の身

体が物理的かつ恒常的に共在することが社会関係の最も安定的な基盤だという暗黙の了解の下に、定住者こそが地域社会の最も正常な構成員であると考えられてきた。地域共同体の「解体」や「再生」もそうした定住者の減少と増加に関連づけられ、移民などの新規参入者の「包摂」も、既存の定住者との同化や平等化としばしば同一視されてきた。

しかし、近年の人間の流動化はそうした前提そのものを覆しつつある。大都市圏での大量交通機関を使った通勤や通学、国際的な人口移動の活発化、さらにはネット社会の進展などによって、人々が居住する空間と取り結ぶ関係の範囲は次第に乖離し、むしろ重ならない方が一般的になりつつある。そのなかで「交流人口」など、非定住者にも注目した地域社会の再検討が学術的にも政策的にも進められ、J・アーリの「移動性パラダイム」のように、定住を自明の前提としない形での地域社会論の新たな試みも提案されている。これらはそれぞれ示唆的な内容をもつが、経験的な分析では従来の術語系にまだしばられ、理論的な試みでは抽象的で思想的な表現にとどまっている面も少なくない。

それに対して本論文は、著者が学士論文以来、調査と参与観察をつづけてきた大久保地域—「新大久保」を事例にとることで、豊富なデータと知識の蓄積の上に、「地域」や「共生」といった従来の術語にあえて準拠せず、観光地「新大久保」の形成以降、この地域に関わってきた多様な当事者たちがさまざまな課題を解決していくなかで、空間性と社会性がどのように結びつけられ、そして結び直されていったかを描き出した。それによって、日常生活上も生活史的にも人々が移動しうることが前提にならざるをえない現代の地域社会をとらえる新たな枠組みを理論的に構築する作業を進め、かつ提示した枠組みの経験的な妥当性も示した。それが本論文の主要な学術的貢献である。

とりわけ地域社会の社会性をテンニース的な原初的な共同性にもとめず、G・ジンメル「社会化 Vergesellschaftung (sociation)」を出発点にして、特定の空間にさまざまな形で参入し、ときには離脱していく多様な当事者たちの間で相互作用が生成し、展開し、変化していく。そのなかで、地域に関わる重要な課題が共有され、一定の解決が見出される動態的プロセスとして、社会性をとらえ直した。それによって、大久保地域—「新大久保」における独自の地域社会形成をあざやかに示したことは、独創性の高い成果として評価される。

この分析枠組みはアーリの「移動性パラダイム」の着想を引き継ぐものであるが、身体の物理的かつ恒常的な共在、共通の課題の発見と共有と当面の解決などの形で、主要な概念がより操作的に定義されている。それゆえ、地域社会のような物理的な空間での秩序形成だけでなく、ネットの仮想空間などの非物理的な空間上での秩序形成にも応用しうる。例えば、「現実 real／仮想 virtual」という形で類比的に定式化されてきた関係性のちがいも、さまざまな空間性と社会性の結びつけのあり方のちがいとして位置づけることができるだろう。その点で本論文の学術的意義は地域社会論をこえて大きく拡がりうるものであり、従来の地域社会論が積み上げてきた豊かな成果に新たな可能性をあたえるものでもある。

もちろん、こうした革新的で挑戦的な研究ゆえの、未完成の部分も本論文は有している。第一に、移動性の定義に関係を結ぶことがくり込まれているように、ジンメル的な「社

会化」＝相互作用の継起と特定の課題が解決されていくという社会性がまだ十分に区別されていない部分があり、しばしば並列的に語られる。もし両者の関係性がより明確に定式化できていれば、第1部での理論的考察と第2部の事例研究でのきわめて興味深い発見をさらに明確に対応づけることができたであろう。「多重レイヤー空間」の成立条件に関しても検討を深められたのではないか。

第二に、著者自身も今後の課題であげているように、複数の関係者ごとにより深いインタビュー調査ができれば、その多重さをより説得的に示せたと思われる。現在の「新大久保」が「特定のエスニシティを前提としないエスニックな空間」となりつつあるという位置づけには経験的な説得力があるが、それだけに、多数派のエスニシティに吸収されない独自性を今後も保持していけるのかなど、将来のあり方に関してはもっと踏み込んだ考察も展開できたのではないだろうか。

けれども、上記の点は本論文の欠陥というよりも今後の可能性の広がりを示すものであり、示唆に富んだ地域社会の経験的分析のみならず、国際的・国内的な人の移動を前提にした社会形成、複数エスニシティの「共生」に関する反省的検討、社会学の古典の現代的読み直し、ネットワーク上の仮想空間まで視野にいれうる形での、空間性と社会性の結びつき方を分析する新たな枠組みの提示など、本論文が有する多くの学術的貢献の意義を損なうものではない。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。よって本論文は博士（学術）の学位請求論文として合格と認められる。